

# 聞名仏教

第 123 号 毎月発行  
(発行日) 2020 年 12 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 人生の實在感への道

東京の大谷派真宗会館発行の機関誌「ザイン」8号に、親鸞フォーラムに出席した中島岳志氏(政治学者)の次のような発言を載せています。

「現代日本における不安とは何か」と問い、それは「生きていることの実感、リアリティが欠如した不安が現代の特徴だ」といっています。

これに関して岡崎京子の『リバーズ・エッジ』という漫画の会話のセリフにもそれが出ていると紹介しています。それは、A「新聞では、オゾン層がフロンガスによって破壊され、地球が大変だと大騒ぎしている」  
B「でもそんなことに、まったく私はリアリティを感じない。それどころか自分自身が今、ここでこの橋を渡っていること自体に実感

がない。そんな時に地球が大変だといったって、それがいったい何なんだ」と。

中島氏は「毎日、同じ事の繰り返し。いい会社に入り、決まりきった路線を歩んで、やがて人生は終わっていく。ユートピアへの希望もない。生きているという実感が持てない。そういう時代が現代だ。そこに現代のいろいろな社会問題が起る元がある。」と語っています。

これを読んで私自身の若い頃の問題がまさにこの悩みでした。そしてそれはいつの時代の人たちにも当然あり得る人間の普遍的な問題だと思っています。  
私が育ってきた昭和20年代から30年代は、日本の社会が敗戦の困窮から豊かな生活を夢見て、先進国アメリカ人のような豊かな生活

がしたいと思う人が多く、それなりに夢があつて、努力していく人たちがたくさんいたように思います。ですから、生きている実感が少ないという問題にまともなぶつかる人は少なかったのだと思います。

しかし、現代は未来に夢が持てない。そして平凡に繰り返す日常があまりにも早く過ぎていく。こういう時代になると、「私が今ここに生きている」というナマの実感が乏しく、足下が空虚

になる」という人が当然、少なくないと思います。

私の場合は高校時代(昭和三十六年頃)、周りを透明なガラスで囲まれた中になるように、外の世界と自分が隔離された感じになりました。非常にうつとうしく、生き生きと生きている実感がまったくもてない。孤独で、少し大げさに言えばよその星から来た異邦人のような感覚が長く続きました。イスに座っていても体がすぐズってしまつて力が出ないというような状態で、これをなんとかしたいと、そればかりを考えていました。それで、何とか解

## 《念佛寺報恩講についてのお知らせ》

毎年十二月二十二日に朝・昼行っておりました念佛寺報恩講の法要は今年(二時)のみの一回に致します。

また今回は法話のご講師をお招きしておりません。なにしろ狭い仏間ですから密になり、新型コロナウイルスの感染リスクがありますので、高齢者の方、ご持病をお持ちの方は今回はお参りを避けて頂いた方がいいかと思ひます。報恩講の勤行は執行致します。

決をしたいたいと思い、いろいろ宗教書を読んでいる間に真宗に会い、やがて念仏を申すようになったのでした。

よく、仏教を求めるきっかけは、死ぬことの不安からとか、死後地獄なりに落ちるのが恐ろしいとか、あるいは自分の行った行為における罪悪感の苦しみであるとか、そういう問題で仏教に帰依する人がありますが、私はそうではなく、一番の問題は「生きていく生き生きとした実在感がない、ナマの真実にであいたい」という問題でした。

幸いにも真宗の教えにであって、高三の時に念仏を申すようになりました。これが私の人生の方向を決づけたのですが、勿論、それですぐ「生きていく実在感が生まれ、目の前の自然や人と直接的に交わり、という実感が持てるようになったのではありません。長い時間がかかりました。けれどもある日、アミダ仏の慈悲に触れて、初めて

目の前の木々の青さが実感でき、それ以後、それまで長い間、心の外と内の間にあった透明なガラスのようになうつつうしい壁は消滅し、生きる力をようやく感じるようになりました。これが何よりも有り難いことでした。

こういう経験があつてからもう四十年近くなりますが、人生のリァリティがどれほど深まったかというといつまでも底が浅くお粗末です。

ただ、最近ことに感じるのは、この世界は一言で言うところと神秘的な世界だということ。鳥が飛んでいるのも花が咲くのも、川面がキラキラと光って反射しているのも、そこに広大ないのちの息吹を感じます。庭に生えている樹木などと、それを見ている私とが共通のいのちの地盤に置かれて、いることをごく少しづつですが知らされてきます。この感覚がもっと深く広くなつて、町で歩いている人々までも神秘に見えたら、どれほどいいだろうかと思

いますが、なかなかそうはいきません。

どうしても人に対しては、頭に染みついていく価値観（人のふるまい、行いの善し悪し、あるいは姿形の美醜など）にとらわれて、人のいのちの神秘的なことにまではなかなか感じられませんが。

しかし人に貫いているいのちは本当は不思議であり光り輝いているものだと思います。そう実感したいとは思いますが、そうならぬのは煩惱（是非善悪・利害損得などの想念）が心を覆っているからだと思いません。

浄土は無量の光明の世界であり、あたたかい量りなきいのちの領域であると經典に説かれています。深い悟りに達した聖者（釈尊など）にはそういう領域が開かれていくのだと思います。浄土こそ真に実在する光明の世界であつて、逆に私たち凡夫が感じている世界は自分の濁った想念（意識）のフィルターを通して感じ

ている世界（穢土）、いわば畢竟幻のような世界である、と仏教で説かれています。

ところで、私が若い頃に陥った問題は私だけの特殊な問題だと長い間思っていました。そうではなく、これはいつの時代の人間にも起こりうる本質的な問題であると思います。

こうした喪失感を解決したいという問題は人が真実にであう大事な縁になるというプラスの意味があり、決してマイナスでも不幸でもなく、人生の新たな扉を開く鍵になり得ます。

ではどのようにして人は人生に生き生きとした実在感を得ることができのでしょうか。それに関しては、いろいろな方法や道があるでしょう。

真宗においては、はかりなき真のいのちの実在は単なる冷たい自然現象ではなく、大悲の智慧の功德を含んだ、人・万物に平等に常に働いている大いなるいのちであること、そのような

用きをアミダ仏として仏陀釈尊は浄土の経説に説いてくださっています。この仏陀の教説によつて、真の実在を学び知ることができま

す。智慧と慈悲の用きであるアミダ仏は憂苦の中に生きていく私たちに大悲をそそぎ、南無阿弥陀仏の言葉とまでなつて万人に喚びかけておられる。このことは人がお念仏を申すことによつて、現実的に具体化されてくるのです。

お念仏のナムアミダブツの声（言葉）は、実在そのものが、「ここにいます。汝を離れない、引き受けている」と仰せくださっているのです。このアミダ仏に触れる時、不思議にも世界と自分との間の壁がとれて、外の環境と自己の分裂がなくなるのであります。

そういうことで、真宗のお念仏は人に生きていく実在感をもたらし用きをもっているのであります。

# 蓮如上人の六字釈

蓮如上人のご教化の特色は南無阿弥陀仏の六字釈でもってアミダ仏の救済を説かれたことである。それをよく表しておられるのが、『お文』の四帖目第八通・第十四通などである。上人は善導大師の六字釈に即して独自の解釈をされて真宗の信心を表現された。善導の六字釈は、

「言南無者 即是帰命 亦是發願回向之義 言阿弥陀仏者 即是其行 以斯義故 必得往生」

（南無というは帰命、亦これ發願回向の義なり。阿弥陀仏と言うはすなわちこれ其の行なり。この義をもつての故に、必ず往生することを得）

であるが、上人はお文四帖目第八通（上人七十一才）に、

「南無」と帰命する機と、

阿弥陀仏のたすけまします法とが一体なるところをさして、機法一体の南無阿弥陀仏とはもうすなり。

かるがゆえに、阿弥陀仏の、むかし法蔵比丘たりしとき、衆生仏にならずはわれも正覚ならじとちかいますとき、その正覚すでに成じたまいしすがたこそ、いまの南無阿弥陀仏なりと、こころうべし。

これすなわちわれらが往生のさだまりたる証拠なり。されば他力の信心獲得すというも、ただこの六字のころなりと落居すべきものなり。

といわれ、帰命する信心の機と、その機を助けまします阿弥陀仏の法とは、機法は一体となつて南無阿弥陀仏にすでに成就している。この南無阿弥陀仏こそ私たちをまるまる往生させてく

ださる証拠であると落居せよ（心得よ）、との仰せである。

すなわち、アミダ仏が法蔵比丘の時、一切衆生の往生をご自身の願行（修行）によつて成就しなければ正覚（成仏）を取らないと誓願し、この願が成就してすでにアミダ仏になつておられる。だから、私どもの往生の体（全部の因）はすでにできあがつている。その証拠が南無阿弥陀仏であり、私たちの往生の定まるすがたである、といわれている。

またお文四帖目第十四通（八十四才）には、上人の六字釈の思し召しがことによく表現されている。すなわち

まず「南無」という二字は、すなわち帰命というころなり。帰命というは、衆生の、阿弥陀仏後生たすけたまえとたのみたてまつるころなり。また發願回向というは、たのむところの衆生を、攝取してすくいたまうころなり。これす

なわちやがて「阿弥陀仏」の四字のころなり。

さればわれらごときの愚痴闇鈍の衆生は、なにところをもち、また弥陀をばなにとたのむべきぞというに、もろもろの雜行をすて、一向一心に、後生たすけたまえと弥陀をたのめば、決定、極樂に往生すべきことさらにそのうたがいあるべからず。

このゆえに、「南無」の二字は、衆生の弥陀をたのむ機のかたなり。また「阿弥陀仏」の四字は、たのむ衆生をたすけたまうかたの法なるがゆえに、これすなわち機法一体の南無阿弥陀仏ともうすころなり。この道理あるがゆえに、われら一切衆生の往生の体は、南無阿弥陀仏ときこえたり。

とあつて、南無阿弥陀仏の「南無」の二字は帰命、帰命は衆生が「阿弥陀仏後生たすけたまえ」と弥陀を憑む心である。また「發願回向」とは、弥陀を憑む者を攝取し（助け）たもう心で

あり、これはそのまま「阿弥陀仏」の四字の心である、と。

このように、愚痴闇鈍の衆生は弥陀を憑めば阿弥陀仏はかならず極樂に往生させてくださるのであるが、弥陀を憑む機の方を「南無」といい、憑む者を助けたもう方（法）を「阿弥陀仏」といって、たのむ機と助ける法とはすでに法蔵菩薩によつて、有り難いことに成就してくださっている。その成就してくださったすがたが機法一体の南無阿弥陀仏の六字のすがたである、と。

こうして、私が浄土にかならず往生できる証拠が南無阿弥陀仏であるから、「南無阿弥陀仏」と聞くと、「ああ、私の往生は阿弥陀仏がまるまる引き受けてくださつてあつた。有り難い」と聞くばかりである。

なお以上の内容に似た表現が蓮如上人が愛読された『安心決定鈔』に表わされている。すなわち、

念仏の行者、名号をきかば、「あは、はや、わが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずは、正覺とらじと、ちかいたまいし法蔵菩薩の正覺の果名なるがゆえに」とおもうべし。

とある。

繰り返しになるが、こうしたお文の思し召しは、要は南無阿弥陀仏と聞こえてくる六字のいわれは、無善造悪の救われがたき衆生（私）を、有り難いことに全面的に引き受けて往生させてくださる証拠（体）だといわれるのである。

なぜかといえば、「十方衆生往生成就せずは正覺を取らない」と誓った法蔵菩薩は永いご修行を成就してすでにアミダ仏になって正覺を取っておられるのである。だから聞かせていただく南無阿弥陀仏の言葉は、すでに私たちの往生浄土の因である行も信もすべて法蔵菩薩が成就してくださって「汝の往生は全て引き受けた、助けるぞ助かるぞ」の仰せである。

こうして南無阿弥陀仏の「南無」というのは帰命ということで、これは「衆生の、阿弥陀仏後生たすけたまえとたのみたてまつるころなり」であり、弥陀をたのむ心、すなわち信心であるし、「阿弥陀仏」の四字は「たのむ衆生を撰取してすくいたまうころ」であるから、「南無阿弥陀仏」には信じる信心（機）もその者を助ける法も一体に成就している、そのすがたが南無阿弥陀仏である。

だから、南無阿弥陀仏という名を聞けば、「あははや私の往生は阿弥陀仏がまるまる引き受けてくださるのであった、このままで助けてくださるのであった」と聞くばかりとなる。こちらから、何一つ用意することもない。このままなりで「まる助け」にしてください、その証拠が南無阿弥陀仏である。

だから南無阿弥陀仏と聞くばかり、仰せばかりである。仰せを聞いているほか

に私に於ける信心は無い。「仰せ一つ」なのである。「アミダ仏の仰せに対して私の方からチリほども加えることもいらないのである。こういう教えが蓮如上人の教えの肝要である。

この元はどこから来ているかと言え、それは弥陀の本願第十八願の成就から来ているといえる。弥陀の第十八願は、

たとい我仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生ぜん<sup>おも</sup>と欲いて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。

であるが、「至心に信樂して、わが国に生ぜん<sup>おも</sup>と欲いて」は「我が誓いを」本當と信じて浄土に生まると欲え<sup>おも</sup>であるから、これは弥陀の誓いを「信じよ」であり「たのめ」であり「まかせよ」である。

そしてその弥陀の誓いは「乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ」であって「十声なりとも一声な

りとも念仏申すばかりで助ける」であって、これは「ソノママナリデ助ケル」「マルマル助ケル」の誓いである。ゆえに十八願は「まるまる助けるで、我をたのめ、まかせよ」のお心である。

この第十八願を法蔵菩薩は永きご修行によつて成就され、助ける法もそれを信じる機（たのむ機）も南無阿弥陀仏に仕上げ、南無阿弥陀仏と私たちに喚びかけておられる。

こうして、もはや私の往生の因は全て阿弥陀仏が仕上げてください、その証拠が南無阿弥陀仏であるから、南無阿弥陀仏を聞くばかりのお助けであるとのご教化が蓮如上人のご教化の核である。（了）

### 〈遠方法話予定〉

二〇二二年一月十七日

講題 「聞名の佛道」

午前十時〜十二時

大谷派名古屋別院（信道会館）

（電 0523233868）

（コロナの影響で岐阜別院の法話は中止になりました）

### 【住職雑感】

現代は仏事の簡略化がかなりのスピードで進んでいる。月参りはもとより葬儀や年回法要の省略や簡素化である。これは現代社会の変化によって、こういう傾向が自ずと出てきたのだと思う。墓じまい、仏壇じまいもその流れである。これによって寺院の経済基盤は縮小しつつある。このように宗教儀礼なり先祖供養への要求が減ってきたのではあるが、仏教そのものへの期待は減っているかといえば、そうは思わない。仏教を知らない人はともかく、ひとたび仏教に触れると、その真理性に感銘してもっと学びたい、聞きたいという人は決して減っていないし、これからもっと増えてくる可能性は十分にある。

ただ問題は、仏教を正確に詳しく説いて導いてくれる人をどう生み出すかである。世間の会社勤めをしながらその余暇で仏教を学ぶのには限界がある。やはり専門に十分学ぶ時間や生活環境がないと人は育ちにくい。そこで仏教を専門に学び、人々にそれを説く人の生活を経済的に支えるシステムなり環境なりが必要であるが、そこが今後の仏教界の大事な課題であるし、広くいえば社会全体の精神文化の課題でもある。

（了）